

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K09	氏名	杉本 幸司
研究主題 —副主題—	若手教員の授業力を伸ばす協同研究の試み —地域教材「拝島分水」の実践を通して—		
所属校	昭島市立拝島第二小学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>若手教員の大量採用に伴い、指導力の向上が一層期待されている。そのことをふまえて市区町村の教育委員会は、様々な研修を工夫して行っている。ことに授業力向上に関しては、様々な形態を工夫し、力を注いでいる。</p> <p>また、各学校においても指導教員が指導案検討、授業観察、事後指導を行い、若手教員の授業改善を行っている。若手教員は管理職や指導教員から指導を受ける研修を繰り返している。</p> <p>しかし、以上のような取組が若手教員の授業力向上に果たす効果については疑問視せざるを得ない。複数の指導教員から以下のような指摘があることからそのことが推察される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導技術の模倣ばかりで、教材研究が不足している。 ・授業のねらいが不明確である。 ・児童の学習意欲を高めていない。 ・児童の思考の流れに沿った授業になっていない。 ・児童に話し合いやグループ活動をさせるに値する課題を与えていない。 <p>これらの実態をふまえて若手教員の授業力を伸ばすには、どのような取組をする必要があるのか、有効な方法を探りたいと考えた。そこで、若手教員と協同した研究活動を行うことにより、校内の同僚の実践意欲を喚起し、若手教員の授業力の向上を図ることを研究のねらいとし、有効な取組を探っていくこととした。</p>
II 研究の方法	<p>仮説を検証するため、以下の内容で取組を進める。</p> <p>①若手教員の研修の在り方 地域の教材開発や教具作りなど協同の体験による工夫した研修を進める。</p> <p>②授業構成の学び 共に指導計画・指導案を作り、児童が意欲的に追究できるようにする。</p> <p>③指導の改善 実践記録を分析し、改善点を明確にする。</p> <p>④授業力の向上 ある特定の教科で習得した力を他に活用できるようにする。</p> <p>具体的には、以下の方法で進めていくものとする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域教材の協同開発（長期休業を利用し、第4学年の2名の教員と、羽村～学区間の玉川上水及び拝島分水の調査をし、教材化、指導計画作成） ●協同研究した授業（実践前） ●協同研究した授業（実践後）

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>本研究の成果は、以下のとおりとなった。</p> <p>1 教材開発の力量を向上させるための足がかり</p> <p>地域教材を扱う際に学習指導要領を満たす学力がつけられるものであるか、児童の思考に沿った授業の骨格作りができるかどうかについて吟味を繰り返して授業実践に臨んだ。その過程において複数の教員が携わり、素材となりうる重要な事柄を見逃してしまうようなことがないようにした。</p> <p>2名の若手教員は、複数の目で地域を見つめ、教材を検討することによる大切さを理解し、その成果を実感することができた。他の教科での教材開発や教材研究に生かし、授業力の向上を図ることができた。</p> <p>2 教材研究に裏付けられた授業の工夫</p> <p>2名とも従来は、市販のワークシートを印刷したり、過去の優れた授業実践の事例を参考に発問や働きかけを考えるということを行っていた。しかし本単元では教材研究による知識を使って児童の発言やつぶやきに対応したり、児童の学習における集中度を見計らって資料提示の場面を臨機応変に考えたりして意欲を喚起することができた。</p> <p>とかく指導技術にのみ関心を抱きがちであったが、それが教材研究に裏付けられたものでなければいけないことを実感としてとらえることができた。</p> <p>3 児童理解の深まり</p> <p>授業中に発言ルールを無視して関係のない発言をしたり、離脱してよそごとをするといった児童も、単元の実践を重ねるにしたがって、有効な発言をして学級の学習を引っ張っていく場面が見られた。</p> <p>この他にも、これまでに授業中に発言をしなかった児童が挙手をしたり、振り返りカードの意欲の面で低い自己評価をつけ続けていた児童が、単元の終了に差しかかると評価を上げたりしたということがあった。授業を充実させることが児童の変容を促すということを実感できた。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>本研究を終えて考察を加えたところ、以下の課題が明らかになった。</p> <p>1 指導計画の柔軟性</p> <p>2学級の実態、理解度の違いによって指導方法を変える柔軟性をもたせられなかった。何通りかの展開を用意した柔軟性のある指導計画を作成するべきであった。</p> <p>2 若手教員同士の学び合い</p> <p>2名が双方の授業を見合い、それをもとに改善点を洗い出して自分の学級の授業に臨むという取組を行うべきであった。</p>